

Title	フオン・ ビュロー著 間崎万里訳 独逸外交政策
Sub Title	
Author	松本
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.1 (1915. 1) ,p.106- 107
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150101-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

影響を來すであらうかと、いふが如き凡そ是等の諸問題は今日何人も知らむと欲する所であるが、今や之に對する明瞭なる解答説明が提供せられた。堀江博士の著『歐洲戰時の經濟財政』は即ち是である。

本書は緒論の外「戰爭と經濟」「歐洲戰時の食糧問題」「歐洲戰爭と倫敦金融市場」「英國の戰時金融政策」「歐洲戰時の財政策」「戰時戰後の正貨問題」「結論」の六章より成つて居る。今簡單に其の内容を紹介すれば、第一章に於ては戰爭の非經濟的なること及び諸國に於て戰爭に備ふる爲めに關稅や中央銀行に關して採り來つた經濟政策否「非經濟政策」を述べ、第二章に於ては平時並に開戰の勞頭に採つた獨逸の食糧品政策を叙し「獨逸が農産物の供給に於て自給自給の狀態に達せず將た又商業上の通路を保護するに足るの海軍力を備へずして自ら歐洲禍亂の首謀者となれるを愚なり」と評し轉じて英國に於ける食糧品の供給狀態並に之に關する政策の過去及び將來を論じ、第三章及び第四章に於ては倫敦金融市場が戰地を去ること遠きにも拘らず開戰の當初突如大破綻を來したる理由を明にし、恐慌の經過並に之に對する英國銀行及び國庫當局の處置を記述批評して頗る詳細を極めて居る。第五章に於ては大體諸國に於て開戰と同時に悉く兌換停止を行つた理由から戰時財政を不換紙幣に依頼するの可否を述べ獨逸に於け

る戰時公債を論評し、第六章に於ては諸國は今回の教訓に鑑みて將來益々兌換制度擁護の爲めに金の爭奪を行ふこととなり其の結果國際金融上資本の輸出益々困難となるべきことを述べ、今や從來外債に依頼し來れる我國の正貨政策の根本的に一變せられざるべからざる時機至れること、並に之が爲めには非募債の勵行、租稅制度の整理、生産費輕減策等によつて輸出超過國となるの外はないと云ふことを述べて居る。本書は前號に紹介せられた板倉敬授著「歐洲戰亂の真相と交戰列國」と同一のセリースに屬するもので、文體は例によつて頗る流暢、通讀僅かに二三時間にして足りる底の小冊子であるが、能く歐洲戰時に於ける經濟財政の現状と將來に於ける歸趨とを示し我國朝野に向つて大に決心する所あるを要する所以を知らしめて居る。予は時局に際し特に經濟學上の素養の有無に拘らず一般の人士に對して一讀を薦めるものである。(増井生)

フォン、ビュロウ著『獨逸外交政策』
岡崎 萬里譯

附 ウイルヘルム第二世治下の獨逸

正 價 六 拾 錢
博文館發行

政治の當局者がその行つた内外政策を發表することの困難

は今更云ふまでもない、獨の前宰相ビュロウ公の著獨逸政策の如きはたとへば現職にあらぬとはいへその遺したる政策の多くは現時の獨逸に於いて繼續せられつゝある以上はその著の「一言一句は決してゆるかぜにすることは得ぬのである。日本の政治家は稍もすれば口を滑らして言實を捉られて困難する滑稽に比ぶれば公の著の如きは意味を外にふくませてその言はんと欲する目的を充分に達してゐる。思想問題に貧乏な我國の政治家の外交に關する言論は餘りに露骨で餘りに淺薄であるから此點は大にビュロウ公に學んでよいと思ふ。公は獨逸現帝を助けて行つたその帝國主義世界政策、海軍擴張の問題についてそのやむべからざる所以を巧みに叙述しありベルンバルザなどの著の如く決してすぐに他國民の感情を害することは成るべく避けて圭角をあらはさぬ様にとめてゐる。

十九世紀後半より二十世紀に亘つての獨逸は物質主義より現實主義の色彩を著しく帯び來つたことは確かである。けれども空想的理想主義は決してその隆を沒してゐない。ベルンバルザなどはこの理想主義の暴露である。ビュロウ公の思想はこの理想主義と現實主義の調和であつてその云ふ所に何となく深みがあると思ふ。英國を評して『健全にして打算的な國民的利己主義』なりと云ひ、そして他國民はこの英國人の性質に學ばざるべからずと云つてゐることなどは英人をは

めるのか惡口するのかわからないとして佛國民の復仇戰を忘れずに獨逸をにくめることに關し、佛人を評して理想の國民と云うてゐる。

獨逸の世界政策についてはその統一より隣近の商工業の發展を評述し、ビスマルクの歐洲政策より一步すすめて世界政策に入る徑路を説いてゐるがその世界政策を過度に論じ、獨逸現今の禍根を残したものとあると思ふ。三國干涉問題につきて日本の怨みを買つたことについて『勇敢なる國民を敵とするは吾人の利益にあらざるなり』云ふてゐる所など青島陥落の今日からみれば何となく味ひあると思ふ。海軍擴張についての意見中『青年國民より一轉して意氣銷沈せる老年となるを欲せずんば吾人と海洋とは密接斷つべからざる關係を有することゝなりぬ』とあるはその名言と稱せらるゝ所で生きたる獨逸人の意志力はここに表現されてあると思ふ。世界平和の擾亂者たる獨逸を敵とする吾人は一面にまた敵の真相を知ることには必要であり、そして本書の如きは著者は偉大なる政治家であるだけ大なる價值あると思ふ。

岡崎氏の譯は一言一句と雖も原文に忠實であり、多小解しにくい點はないがこれは原著者の思想そのものが所謂我國人の云ふ流暢のものでないからである。譯者の大なる努力によつてあらはれたこの世界的名著は我國國民の皆讀まざるべからざるものであると思ふ。(松本生)